

実務者検討委員会（第2回） 議事概要

日時：平成29年12月15日（金）14：00～16：00

場所：中央合同庁舎4号館 共用1203会議室

【議事】

1. 分野内におけるデジタルアーカイブ推進に係る課題整理
2. 国におけるデジタルアーカイブ関連の動向報告
3. 分野・地方のデジタルアーカイブ推進に向けた具体的施策について
4. 人的基盤の整備について
5. ジャパンサーチ（仮称）の構築・連携に係る検討
6. 質疑応答

【概要】

1. 分野内におけるデジタルアーカイブ推進に係る課題整理

○国立公文書館荒木次長より資料1に沿って説明。

- ・現在、国立公文書館では、「国立公文書館デジタルアーカイブ」と「アジア歴史資料センターデジタルアーカイブ」の2つを運用中。いずれもデジタル化の更なる推進が課題となっているが、「アジア歴史資料センターデジタルアーカイブ」では一般への提供データの拡充も課題となっている。

2. 国におけるデジタルアーカイブ関連の動向報告

○内閣官房明治150年室石崎参事官より資料2-1に沿って説明。

- ・来年、明治政府樹立満150年になることを踏まえて、「明治150年」ポータルサイトを立ち上げているが、その中で、各所で作られている明治時代に関連するデジタルアーカイブも集約している。

○内閣府知的財産推進事務局岸本参事官より資料2-2に沿って説明。

- ・11月に開催した産学官フォーラムは100人超の参加を得て、アンケート結果も好評であった。来年度以降も同様のイベントを実施し、デジタルアーカイブへの理解を深める機会を提供していきたい。
- ・同フォーラムでは、産学官の様々な有識者に登壇いただき、「デジタルアーカイブ社会のイメージ」や「オープン化の促進」など様々な点について意見が出された。

3. 分野・地方のデジタルアーカイブ推進に向けた具体的施策について

○新潟大学原田教授（参考人）より資料3-1に沿って説明。

- ・マスとパーソナルの間にある、中間的コミュニケーション領域の映像資料のアーカイブに対する取組が重要。

- ・自治体には、自治体が設置した視聴覚ライブラリに保管された資料や、市史編さんのために集積された資料などがある。
- ・住民の日常生活の写真や映像のもつ社会性が人文学研究上、重要なポイントになる。
- ・住民参加型の発掘プロセスには重要な意味がある。住民に見える形で地域からボトムアップする形になれば、それだけで地域の活性化に繋がり、アーカイブ資料に関しても、ただ懐かしいだけでなく、色々な情報が出てくる。
- ・学校教育での利用には価値がある。他方、自治体が観光や広報に使うのは、一定の処理をしておく必要がある。また、アクションリサーチ等の技法が学術的に確立されていないのが課題。
- ・中間的コミュニケーション領域の映像資料は、プライバシーへの配慮が必要だが、著作権的な課題にたいしては、特定の年代を超過したものは自由利用可能にする、当該地域の範囲内でだけ利用可能にするといった形で提供できるような、ゆるやかな社会的合意の仕組みが必要。そのためには、自治体の判断だけではなく、大学や民間による中間的な組織の枠組みが必要。
- ・最大の問題は、異なった機関との連携。異なった機関の異なった資料を繋げること。研究はそれぞれ分断しているが、研究に必要な資料は重層化し、融合している。これらの異なる領域の資料・情報を繋げるには、企画力のあるコーディネータが必要。

○県立長野図書館平賀館長（参考人）より資料3-2に沿って説明。

- ・地域の情報遺産は危機的状态で、古くから残っていた土蔵が簡単に壊されていっている。未来にむけて暮らしの中で活用できる近代150年の記憶が消えつつある。デジタルアーカイブで議論されているのは「氷山の一角」にすぎず、地方にはたくさん資料があるが予算も人もいないため、保全が難しい。
- ・水面下から公なところにデータが上がってこないのは「他人事」だから。一般市民が当事者意識を持たなければこの状況は変わらない。一番に対策すべきは、ファミリーヒストリーやコミュニティの共通の記憶を扱うことである。
- ・アーカイブというと防災の話が出てくるが、町の人々の心はあまり動かない。それより地域の歴史・地質・伝統技術を絡めた教育・観光・地域PRなどの話にすると、町に対する疑問がたくさん浮かび、関心がわいてくる。
- ・ライブラリの強み（＝情報公開基盤、人と人をつなぐ機能）を生かして、地域のデジタルコモンズを作っていく、地域生活の土台となる記憶の銀行を作っていくことが大切。
- ・根本的には、地域住民自らが知りたい内容をもつアーカイブが必要。「ジブンゴト」としていかに使いたいと思えるアプリがあるか。利用したいアプリを使うことによって、自動的に地域のデータがアーカイブされる仕組みを行政側で創ることが必要。
- ・Instagramやtwitterのような気軽さで写真を投稿できるストレージや、自由に参加可能なプラットフォームを国に構築してもらいたい。
- ・地域の1～数か所に、スキャナ等の機器を備えたデジタルアーカイブスタジオが設置されれば、地域のデジタルアーカイブ整備の推進に役立つ。

○北本構成員より資料3-3に沿って説明。

- ・聖書に「新しいぶどう酒を新しい革袋に入れる」との言葉があり、この言葉が意味するところの、古いものに新しいものを継ぎはぎしてうまくやろうとしていないかというのは、デジタルアーカイブにも通じる問いかけであると思う。
- ・人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）で行っているプロジェクトの一つとして市民のためのオープンデータを紹介する。『万宝料理秘密箱 卵百珍』という江戸の料理本を現代のレシピに翻訳するプロジェクトを行った。
- ・このプロジェクトで翻訳したレシピをオープンデータ（CC BY-SA）でCODHのウェブサイトに公開したが、より大きな反響を得られたのは、そのレシピをクックパッドでも公開したことの方であった。
- ・公開方法と反響の大きさについて、『万宝料理秘密箱 卵百珍』をデジタル化し公開するだけでは反応が無く、レシピを個別のサイトで公開しても大きな反響は得られなかった。一方、レシピを写真付きでクックパッドでも公開することで、予想もしなかった大きな反響が得られた。つまり、データ公開そのものではなく、クックパッドでも公開したことにニュース価値があったと考えざるを得ない。
- ・クックパッドで公開することにより、利用方法が自動的に思い浮かぶだけでなく、料理の再現性にも確信が持てるし、馴染みのプラットフォームにあれば「自分たちのデータ」と感じることはできるのではないか。
- ・古いコンテンツを古いやり方のままデジタル化することは、古いもの（本）に新しいもの（ウェブ）を継ぎはぎしただけであり一般のユーザーには活用できない。古いコンテンツを新しいやり方で公開することが重要である。
- ・ただし、本プロジェクトは最初からクックパッドへの掲載を想定した作業を行っているからうまく進んだのであり、たまたま手元にあったデータをアップロードしただけではないことを強調しておきたい。
- ・どのデータを誰に向けて選択するか？どこにデータを持っていくか？どのようにデータを変換するか？自分が保有するコンテンツにどのような付加価値を付けていくか、データの利活用にはキュレーターのセンスが必要であり、こういった人材を育成することがデジタルアーカイブの課題。

4. 人的基盤の整備について

○岐阜女子大学井上教授（参考人）より資料4に沿って説明。

- ・大学でのデジタルアーカイブを担う人に向けた技能の教育では、撮影の技術や保存、管理、公開、メタ情報のつけ方などを教えている。他に法と倫理、コミュニケーション能力、ナレッジマネジメント、開発事業書を見る能力などを教えている。
- ・実は、第三者によるアーカイブ化では実際には利活用できない。解像度が低かったりして、手元が見えず、技術継承ができないためである。技術継承当事者によるデジタルアーカイブ、口伝、継承が必要。アグリゲーター、プロデューサー能力、実践現場での地道な取組が重要である。

- ・国の取組は、地方からの信頼を得ることが難しい。国立科学博物館は、JBIFの構築当初、ナショナルセンターとしての信頼性を得られなかったが、その後、レッドリストの共有によって実際にシステムが役立つことを説明したり、知財の使い方の共有などを行ったことで信頼性を得ることができた。
- ・人材育成の在り方は、魅力的な資料選定ができる人、活用できる人材育成が本丸。
- ・国が果たす役割は、ナショナルな組織が中心となって、実践現場での地道な取組が重要。財政的な援助も必要だが、同じ分野でバラバラな基幹データを統一すること、入力だけでなく提供を含めたガイドラインの共有化が必要。関係する自治体職員や民間も含めた教育の機会の提供が重要。
- ・私立大学研究ブランディング事業の枠組みでは、国内大学のアーカイブ化で採択されたのは岐阜女子大だけ。現場の人にアーキビストになって欲しい。各現場のデジタルアーキビストのキャリアを融合し、技術を残すことが大事。

5. ジャパンサーチ（仮称）の構築・連携に係る検討

○国立国会図書館川鍋副部長より資料5-1及び5-2に沿って説明。

- ・課題は前回も伝えたとおり、各分野・地域コミュニティの「つなぎ役」の明確化やメタデータ・サムネイルの流通促進等。
- ・つなぎ役の明確化においては、一つの組織で全ての役割を担う必要はないため、分野ごとに、メタデータの標準化、メタデータの集約、オープン化の推進といった、つなぎ役が果たすべき役割の分担について整備・明確化が必要。
- ・ジャパンサーチ（仮称）は、つなぎ役を通じた連携を原則としたいが、現状つなぎ役がない分野については、どういった基準でどこと連携していくべきか、連携の方針をこの会議で決めていただきたい。
- ・ジャパンサーチ（仮称）と連携いただくデータ提供機関には、メタデータ（可能なサムネイルも）のオープン化の準備をお願いしたい。
- ・ジャパンサーチ（仮称）が魅力あるポータルサイトになるためには、キュレーションページを作成する必要がある、そこに協力してもらえらる仕組みも考えてもらいたい。
- ・また、知財事務局からの依頼を受け、標準メタデータフォーマットの検討を行っている。検討においては、ジャパンサーチ（仮称）との連携のためのフォーマットと、集約されたメタデータを利活用するためのフォーマットの2段階がある。
- ・連携フォーマットの段階では特に指定することは想定していない。利活用フォーマットに関しては、分野を横断する標準メタデータモデルを検討中。素案を次回の委員会でお諮りしたい。

6. 質疑応答

（杉本構成員） デジタルアーカイブを構築していく上で、新しい技術を活用していく必要があると思う。クラウドを活用する等、国がプラットフォームの環境整備を行えば、地域の各アーカイブ機関はコンテンツ作成に集中して取り組むことが可能と

考えられるか、お聞きしたい。

(高野座長) 物理的に同じサービスでなくても、ルールが一緒であれば、IIIF ベースでそれぞれの画像が公開されているというような繋げ方もある。

(平賀参考人) 環境が整備されても、デジタルアーカイブの活動をどのように行うかが課題。教育プログラムの中で、あるいは地域の図書館が果たすべき役割に加えて、アプリケーションの横展開もあって「Facebook があるよ、やってみない」というふうに広がるのが本当は望ましい。

(杉本構成員) セキュリティ・システムの構築がデジタルアーカイブの活動を進めるうえでバリアになっているか。その意味でもクラウドを活用するのは良いと思う。

(井上参考人) 独自にデジタルミュージアムをやっているが、小規模機関では新 OS に対応するだけでも大変なので、大きいプラットフォームができるとアーカイブの促進になる。

(生貝構成員) ここで検討されてきたアーカイブというのは MLA 的、対象主義的、オブジェクト的なものに対し、原田氏などが話したことは人文社会学的なアーカイブで、Inter Subject で、今まではアーカイブとは言ってこなかった。山間部に入って調査を行うという、まさに人文社会分野における研究で、社会教育の問題に他ならない。分野によって言葉の意味が違う。地域のつなぎ役の育成は、社会教育施設との組合せや、大学の役割とのセットで考えていく必要がある。

(高野座長) デジタルアーカイブという会議名だからといって、同じ名前を使っている活動をすべて取り込んで、究極版をデジタルアーカイブジャパンとして作ることは出来るはずがない。本来であれば発信されるべきデータが十分に発信されていない状況を打破して、色々な観点から研究として取り組む事や、地域のコミュニティの記憶を記録する時に、その活動の上澄みが中央に登録されていき、小さなアーカイブ間の連携をサポートするようなデジタルアーカイブの構築等、活動の基盤となるようなプロジェクトの議論が必要。

(山崎構成員) 地域のアーカイブの担い手は図書館であったり、大学であったり、バラバラであるからこそ、それらが連携する。そして、実際に相談に行かないと固有の課題は分からない。データを自分たちで勝手に作っている部分もある。だから、一律にマニュアルを配ればいいわけではなく、人材と教育が必要。アーカイブの種類はたくさんある。デジタルアーカイブを機関主体でつくるのではなく、運動的に、市民と一緒に構築するプロセスがないと広がらない。

(北本構成員) 市民参加のデジタルアーカイブを作ろうとしているが、最大のボトルネックはコンテンツのフィルタリングである。例えば写真の場合、公開しても問題がない写真と問題がある写真を人間がチェックするとなると、そこがボトルネックとなって上手くいかない。他の部分は AI で効率化出来るだろうが、公開するデータのクオリティチェックの自動化は Google や Facebook でさえ苦勞している部分なので、そこをどうするかが課題。

(高野座長) 小さなコンテンツの塊において、そのコンテンツの発信者が責任を持ち、コンテンツ自体は大きなプラットフォーム上で発信されていることが一番障害は

少ない。

(北本構成員) その責任分担が必要。

(後藤構成員) 大学や博物館を回って話を聞いているが、都道府県ごとに状況が異なる。例えば防災分野であれば、静岡、和歌山、沖縄などは意識が高いが、災害が少ない県は興味を示さない。地域や機関の特性に合わせたデータモデルを理解して、デジタルアーカイブを作ることができる人材が必要。そういった人材が現場に入ってデータをつくる事で、コンテンツの拡充や地域の人材育成にも繋がる。そのような形でデジタルアーカイブの構築促進と人的基盤の整備が進むことが望ましい。

(高野座長) メタデータの標準化や整備について、アグリゲーターたるつなぎ役がその分野すべての標準を作るとは難しく、上手くいかないジャンルも多い。

(後藤構成員) 各地域の事情を分かった上でモデルをくみ上げていき、実際の国際標準とすり合わせていく事の出来る人材を育成する事が必要。

(高野座長) 例えば、昔の地震の記録を文献から掘り起こすために考古学の文献を見ている人にとっては、考古学とは全く違う分類が必要。同じ資料が別の形のメタデータをもって違うアーカイブの一部に入っていく事が重要となる。

(杉本構成員) 私は、メディア芸術分野やスポーツ分野におけるデジタルアーカイブの構築に関与しているが、メタデータ連携を進めるうえで、項目レベルのモデル化は、混乱が生じるおそれがあるので注意が必要である。分野の知識もある専門家がいないとできない。

(高野座長) ジャパンサーチ (仮称) 連携の進め方について手順化して下さいと言うと、国立国会図書館の中だけで全部進んでいって本委員会で最終検討が出てくるみたいなことになるとまずい。

(川鍋構成員) (分野横断で共通する標準メタデータについては) そういったことのないよう、合わせてヒアリングなども行っていく予定である。また、各分野のメタデータの標準については、それぞれの分野で決めていったもらうものである。

(細矢構成員) アーカイブ化に当たっては、参加者が必要だと理解する必要がある。専門的な話をしすぎると、参加者側が足踏みし、関係ないと思われてしまう。何でも出せばよいと言うのではなく、どのようなデータを集めるとおもしろいことができるというストーリー・事例を示して説明する必要がある。見本となるショーケースが必要。

(原田参考人) 現場的にいうと、まずは資料を地域で共有化することが重要となる。そうした観点からローカルとナショナルの関係を見ると、往還関係があった方がよい。現場において、今は基準がないので、国立国会図書館がメタデータ等の基準を作ると、ローカルの各機関はどうしてもそれに倣いがちになる。それが簡便であり、責任回避ということもあるだろう。逆に、地域で無価値と認識されている資料が、実はいろいろな活用法があることが知られると、住民においてその価値が再考され、年代、場所、内容等の情報をメタデータとして盛り込む労苦に社会的意味や価値があることが分かる。ジャパンサーチ (仮称) 等に組み込まれることにより、繋がりが持つ価値が発見される。ローカルとナショナルの関係は両義的で、柔軟にやれば

互いにメリットになる。

(高野座長) 本日参考人の方々にお越しいただいたのは、先端のユーザーであり、アーカイブのクリエイターでもある方にとって、どんな形のシステムや利用許諾等が一番役に立つのか、または望ましいのか、ご意見お聞かせいただきたい。

(山崎構成員) 人材育成は難しく、図書館でメタデータを知っているかと尋ねても1割ほどしか知らない。つなぎ役はほとんど知らない。人材育成をどこでやっているのか。大学の司書課程で学ぶというのはあるが、ただ現実にはほとんどないと思う。大学側に言わせれば「受け皿、ポストがない」。デジタルアーカイブを研究していると左遷されるという話すらある。

(高野座長) 専門家だけではなく、色々なジャンルの人達が、整理された国の知識にアクセスできるようにする事でデジタルアーカイブが役に立っている。

(井上参考人) 教育に当たり、司書、学芸員だけではダメな時代で、アーキビストとしてプレゼンテーションすることが必要と話している。企業からアーキビストを採用したいという連絡が半年間で3件来ており、感触は掴んでいる。

(生貝構成員) 著作権について、原田氏の話に出てきた公開範囲を地域に限定する点は重要。選択肢は公開・非公開の二通りではない。情報は必ずしも公開されればいいというわけではない。執務室での話が公開されるのであれば、記録を捨ててしまえということになる。プライバシーを考慮すると、中間的な公開の在り方を考える必要がある。今の著作権法はそれを考えていない。

(高野座長) 「ひなぎく」の際も問題になったが、東北大にデータ提供するのは納得してもらえたが、国立国会図書館に持っていく事に対してはストップがかかり、もう一回許諾を取り直すことになって大変であった。

(平賀参考人) データをキュレーションするというのは誰がどの時点でやるのか。できるなら、地域の人が地域の情報資産を生み出していけるように、関わりを持てる緩いナショナルな基盤ができてほしい。

(原田参考人) 研究的な観点から言うと、ジャパンサーチ(仮称)に繋げることによってどうなるのかをみてみたい。地域ごとの特色あるデータの比較などをやってみたい。それにより研究の枠組みが変わる。そして、デジタルアーキビストの価値や必要性も出てくる。研究も実務的であることで、大きく変わることになる。

(井上参考人) 技術伝承の当事者に話を聞くと、後ろから撮れ、手元が映るように、という目から鱗の指摘が出て来る。学生からは多方面に撮ればいいのか、と言われるが、何のために写真を撮るのかという観点が必要。

以上